



長崎県教職員組合

障害児教育部だより いっぽ(*^^*)



ながさき愛の映画祭 感想号

(第3回学習会)

2023. 3. 10

「片袖の魚」(東海林 毅 監督)

ながさき・愛の映画祭に
参加して...

片袖の魚を観ました!

何の予備知識も無く、しかも数分遅れて会場に入ったのでまず音声ガイドにびっくり。
「ヒカリがごちなく笑う」
「ヒカリが前を向いてほほえむ」
と、登場人物の動きに合わせて声かする。
最初はとまどったが慣れてくると、映画の内容がとても分かりやすく入ってくることに気づく。目の不自由な人のためだけでなく、私のように理解するのに時間がかかる人にもやさしい音声ガイド。映画の内容も素晴らしいけれど、音声ガイドには特に感動しました!

心に残ったシーン
トランスジェンダーのヒカリがスーツをピンと着こなしてさぞと歩いているシーン

心に小さな光が灯るようなラストシーンでした!

いざ〜すてき...と思っ 調べたらファッションモデルさんだと分かりなるほど〜!と糸内得

昔のサッカー仲間たち 態度もとてもリアル。気を使っているようで興味津々で無神経で...

(小・教員)

短い時間でしたが、人の強さ・弱さ、尊さ・卑しさ、美しさ・醜さ、大らかさ・心の狭さ...など、色々考えました。多数派目線の安直な発言をしてはいけない、改めて自分を振り返ることができました。すべての人が自分らしく生きられる日本になるように、身近な人たちと一緒に行動していきたいと思います。(中・教員)

人間は自分が多数派で安心したり、少数派の人を好奇心で見たりしてしまうような気がします。今回の映画祭で色々な人の気持ちがよく分かりました。そして、偶然、心と体が同じ性で生まれた私たちにもできることがたくさんあると思いました。だれもが、ありのままの自分を受け入れられ、生きやすい世界になってほしいです。(小・教員)



観ていて、とても心がむずむずしました。自分が知らないうちに、相手を嫌な気持ちにさせてしまっていることがあるかもしれない、と思ったからです。この映画は、自分を振り返る良いきっかけを与えてくれました。また、どう接するのが相手が心地よいのか、自分で感じ取り、相手を尊重した言い方ができるといいなと思いました。誰に対しても、ひとりの人として、その人を尊重しながら、接していくことが必要だと感じました。(学生)



多数派は、少数派、特に、性的少数派に対して「何を言ってもいい」のような差別意識があることに嫌と言うほど気づかされた。自分がヒカリの周囲にいる人だったら何と言う?どうする?差別発言をする人に対して、「差別だよ。」と言う、一緒になって笑わない、その場を立ち去る...、関係性によって変わると思うが、何か行動したい、行動せねば、そんなことを考えさせられた映画だった。(小・教員)

「パブリック 図書館の奇跡」
(エミリオ・エステベス 監督)



ホームレス、図書館員、警察、市長候補者など、それぞれが、自分の立場ばかりで、最悪な最後か、と思っていたら、丸裸で意表をついた終わりにびっくりでした。

寒さをしのぎたいという思いだけだったのに、1人を悪者にして、それで突き進もうとする優位な立場の人の考えの怖さを感じました。自分の立場を優位にしようとして情報を操作しようとする怖さを感じました。弱い立場はどうしたらいいのかな？「公共機関は、民主主義の砦」という言葉は、考えさせられる言葉でした。言葉にするのが難しい。でも、観てよかった映画でした。(小・教員)

ホームレス利用者の体臭が他の利用者へ迷惑となるため、図書館員が本人の同意なしに外へ出したことを訴えられる、というエピソードで考えました。

わたしの仕事は小学校教員。子どもの臭いは、わたしたちの仕事でも難しい問題です。子どもが吐く、排泄の失敗をする、鼻水や鼻くその後始末をしない…などは、本人に周囲を困らせようという悪意など全くない。ましてや体臭は、本人は自分の臭いに気づいていないことがほとんどでありながら、本人が改善の対象であり、寄り添う視点がないと、映画にもあったように訴えられるくらい子どもを傷つけることが容易に起きる。この図書館員や警察署長は、ホームレスに寄り添う立場を自ら選択して、ユーモアと希望が感じられるラストに救われる映画でした。だけど、わたしの現実には、「子どもに対して権力をもつ教師である自分」>「生きる主体である子どもに寄り添う自分」だよなあ、と主人公に憧れをもちながら観ました。この映画祭でないと出会えない映画だと思います。とてもおもしろかったです(小・教員)。

『私たちの日常は大きく変わりました。これまでの「当たり前」も大きく変わっていきます。そんな今だからこそ、できることがあります。この映画祭は「みんなが安心してらせる社会」を目指しています。たくさんの「ちがひ」と出会い、これからの新しい世界を、共に生きるヒントを、一緒に探しに行きましょう。』ながさき・愛の映画祭代表の儀間由里香さんの言葉です。

コロナ禍も終息に向かおうとしている今、私たち教職員が、子どもたちと過ごす学校はどうでしょうか？「みんなが安心して過ごせる」「たくさんのちがひと出会う」「共に生きる」そして「共に学ぶ」学校を作りたいものです。

映画の感想には、「多数派」「少数派」「優位な」「立場」というキーワードが何度も出てきました。何か分からないことに出会った時に、自分事として考えてみる、そこから始まるのではないのでしょうか。

これからも、共に学び続けましょう。

